

大 博物館 だより

津山郷土博物館



いんのしょうひ
院庄碑 貞享5年(1688)

『太平記』によれば、元弘2年(1332)元弘の乱に敗れた後醍醐天皇は、鎌倉幕府によって隠岐に配流された。その途次、天皇が美作院庄を宿所としたとき、備前国住人児島高德がひそかにその庭の桜樹に「天莫空勾踐、時非無範蠡」の詩を書き付け、天皇を励ましたという。これが古来著

名な院庄の故事である。この碑は貞享5年(1688)津山森藩の家老長尾勝明が館跡の東大門跡と伝える場所に碑を建て、故事の顕彰を図ったものである。これは元禄5年(1692)の徳川光圀の湊川建碑に先立つこと4年で、近世尊王思想を考える上での重要資料といえよう。

二つの院庄再論 — 館跡と構城跡 —

1

津山市神戸に所在する院庄館跡は中世美作守護職の居館跡と推定され、かつ元弘2年(1332)の後醍醐天皇と児島高德をめぐる、いわゆる院庄故事の伝説地として、大正11年国の史跡に指定されている。一方、津山市院庄に所在する院庄構城跡は、館跡の南約600mにあって、戦国時代を中心とする平城跡とされている。このような相近接する類似した遺構の関係について、筆者はかつて館跡と構城跡はどちらも守護所跡であり、元弘2年以後の南北朝時代に前者から後者に守護所が移転したと考えた。そして、鎌倉時代と南北朝・室町時代との守護権力の性格の相違がその政庁の移転をもたらした原因ではないかとの推測を付け加えたところである(拙稿「二つの院庄—館跡と構城跡—」『博物館だより』19号、津山郷土博物館、1998年)。しかし、その後再考したところ、このような説明は両遺構についての通説的理解をむりやり整合させようとする論理であり、必ずしも史料に忠実な解釈ではないと考えるに至った。そこで、あらためて史料に即して、両者の関係を再検討することにしたい。

2

院庄館跡の現状は、中心部に明治2年創祀の作楽神社があり、その東西北の三方を幅3~5m、高さ0.5~1mの土塁が巡る。ただし、南方は旧河道により削取られている。土塁の範囲は東西約150m、南北約250mである。また、土塁の内外には御館・堀・大門などの館関連小字が遺存する。なお、土塁の外側にある幅約5mの堀は昭和19年の学徒動員で穿ったものである。東面土塁の中央やや北よりに貞享5年(1688)津山森藩家老長尾勝明が設置した院庄碑が現存する。碑銘文(『作陽誌』苫西郡古跡部神戸条に同文がある)の一節に「今、邑民伝えて称はく、往昔の桜泯滅すること既に旧し。その地曾て東大門と号す。近くその遺蹤に因って新桜一株を栽す」とある。これによれば、児島高德が削って詩を書き付けたという桜はすでに消滅しており、貞享5年新たに一株を植樹したことがわかる。

院庄館跡については、これまで津山市教育委員会

による二次の発掘調査が実施されている。第1次調査は昭和48年11月から翌49年3月までで、館跡の中心部に7箇所、土塁部に5箇所の調査区を設け、井戸、土塁などを検出した。その成果によれば、土塁の盛土は大別して上層と下層からなり、その上層は昭和19年の堀掘削時の盛土と推定されること、下層は盛土中に勝間田焼が出土することから、鎌倉時代の遺構であること、館跡東南部で検出された井戸も鎌倉時代と推定されることなどが確認された(河本清「史跡院庄館跡発掘調査報告」津山市教育委員会、1974年)。第2次調査は昭和55年11月から翌56年1月までで、館跡の範囲確認を目的として、土塁部の外側へ8箇所の調査区を設定して実施した。その結果、東面土塁の東約33mの地点で幅2.5m、深さ55cmの南北溝を検出した。溝内から備前焼・勝間田焼が出土しており、時期は鎌倉時代と考えられる。報文はこれを館跡の東限施設とするが、東面土塁から33mも離れていること、条里の界線と一致していることからみて、条里関連遺構の可能性が高い(行田裕美「史跡院庄館跡」津山市教育委員会、1981年)。

上のような発掘調査成果は次のように集約できよう。第一に、館跡の規模は東西約150m(南北は破壊のため不明)で、周囲を土塁で囲む単郭の構造である。土塁の外周堀は遺構としては確認されてないが、あるとすれば、現在の堀とほぼ同位置で、規模も現状の約5mを大きく超えることはないと思われる。第二に、遺構の時期は鎌倉時代を中心とする。鎌倉時代の遺物以外にも、近世初期の遺物が出土しているが、これは貞享5年の整備に伴うものと考えられるので、時期の下限は不明である。第三に、遺構の性格は居館跡と規定してよい。

3

一方、院庄構城跡は平城で、現状で50m四方、比高約2m程の高まりが認められる。近世出雲往来に北接し、南は民家、東西北は水田、北はJR姫新線で画される。慶長8年(1603)美作に入国した森忠政はまず院庄の古城に入ったが、「森家先代実録」巻5にその構造・規模が詳しく記されている。それ

によれば、本丸は50間(約90m)四方で、その周囲に内堀がめぐり、さらにその外を外堀が囲む。内堀の規模は東堀が長38間(68m)・幅9間(16m)、西堀が長68間(122m)・幅13間(23m)、南堀が長54間(97m)・幅12間(22m)、北堀が長38間(68m)・幅8間(14m)を測る。森忠政が居住したのは一年余りであるが、その後の寛永15年(1638)城郭を破壊して水田としたとされる。発掘調査が実施されていないので、遺構の詳細は不明であるが、同書の記述によれば、構城跡は内郭・外郭の複郭構造で、規模も院庄館跡よりかなり大きいと思われる。

4

ところで、中世の美作守護所は通説のごとく院庄にあったとみてよい。以下その根拠を述べる。まず、「作陽誌」苫西部県邑部神戸郷条に「作州府院庄」とあること、次に「作陽誌」同条所引「太平記綱目」に山名時氏が「直に国府に打入院庄城をせむ」と記され、国府即ち院庄城と解されることである。どちらも第二次史料で必ずしも史料価値は高くないが、以下の状況証拠からも中世院庄に守護所があったことが傍証される。第一に、「森家先代実録」巻5に「右、院の庄の古城ハ、貞治年中、山名伊豆守居城之由」とある。山名伊豆守時氏は貞治元年(1362)南朝に属して美作を制庄したが、貞治3年(1364)には幕府に降って、美作を含む五箇国守護職を与えられた(ただし正式の美作守護は子の義理)。したがって、山名時氏の院庄在城は守護としての活動と理解される。第二に、応永21年(1414)播磨国矢野荘学衆方年貢等算用状(「教王護国寺文書」巻3)によれば、大夫殿即ち赤松義則が矢野荘に対して「作州院庄御持人夫二人」を課している。これは赤松義則が美作守護として、守護所院庄の経営に関わることと解される。第三に、前述のように、森忠政は入国後まず院庄に入った。忠政は美濃出身の武将であり、美作入国には土豪たちの抵抗があった(「美作一國鏡」)。忠政の院庄在城は、旧来の守護所に入ることにより、美作の正当な支配者たることを誇示するデモンストレーションではなかろうか。

このように、南北朝・室町時代の美作守護所は院庄にあったことが確認されるが、それは院庄構城跡

のことと考えられる。なぜなら、「作陽誌」や「森家先代実録」の記す院庄城・院庄古城は院庄構城跡を指しているからである。また、院庄館跡の規模は一般的な豪族居館とほぼ等しく、守護所としては小規模すぎるのではなかろうか。さらに、院庄城は明治22年以前の神戸村にある院庄館跡よりも、院庄村にある院庄構城跡が地名からもよりふさわしい。

5

以上の考察のように、中世の美作守護所が院庄構城跡であるとすれば、院庄館跡を守護所とする通説的理解も再検討を迫られよう。「太平記」巻四には後醍醐天皇が院庄に入ったと記すのみで、守護所とは記さない。また、「作陽誌」も院庄館跡を後醍醐天皇駐蹕跡とするのみで、城郭とも守護所とも認識していない。これらを含めて院庄館跡を守護所とする史料は皆無である。

では、南北朝・室町時代の美作守護所が院庄構城跡であるとすれば、それ以前の鎌倉時代の守護所はどうか。それは溯って構城跡にあったとも、あるいは別の場所にあったとも考えられるが、その結論は今後の構城跡の発掘調査等に期待したい。院庄館跡を守護所とする今日の通説は、後醍醐天皇が宿所としたとする「太平記」の記事と院庄に守護所があったという「作陽誌」「森家先代実録」等の記事を無媒介に結合した結果にすぎなかったのである。

ただし、以上の私見が成立するとしても、史跡院庄館跡の価値が何ら減するわけではない。なぜなら、第一に、それが鎌倉時代の豪族居館の良好な遺跡であることである。美作中央部の武士団としては漆間氏が有力である。同氏の本拠を久米南条郡稲岡荘(現久米南町里方)とするのが通説的理解であるが、漆間時国の五世の祖漆間元国は神戸大夫と称されていること(「法然上人行状絵図」)からみて、漆間氏の本来の根拠地が神戸郷にあったと推定される。とすれば、院庄館跡は漆間氏の居館であった可能性がある。第二に、院庄館跡は近世尊王思想の代表的史跡であることである。津山藩による貞享五年の建碑は、徳川光圀による湊川建碑に先立つこと四年であり、全国的にも初期の顕彰運動と思われる。このような新たな視点に立って、院庄館跡を改めて評価すべきと思うのである。(湊 哲夫)

平成17年度 博物館行事予定

行事名 日程	展 覧 会	町奉行日記を読むⅦ 古文書講座	松平 齊民	近世史講座	夏休み子供歴史教室 弥生土器をつくる	文化財めぐり (友の会)
平成17 3	3/19					
4	特別展 津山松平藩とその系譜					
5	5/8	●5/12				
6		●6/9		●5/26		●5/21
7				●6/23		
8		●7/14		●7/28	●7/21	
9					●8/11	
10	10/8 特別展 高野神社の文化財	●9/8		●9/22		●9/17
11	11/6	●10/13		●10/27		
12		●11/10		●11/17		●11/5
平成18 1		●1/12		●1/26		
2		●2/9		●2/23		
3	3/18 企画展 彫無季の芸術	●3/9		●3/23		●3/11
4	4/16					

博物館入館案内

- 開館時間：午前9:00～午後5:00
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料
※ () は30人以上の団体

博物館だより No.46 平成17年4月1日発行

編集・発行：津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92

☎(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874

E-mail: tsu-haku@vt.t.ne.jp

印刷：有限会社 二葉印刷

★は津山松平藩の槍印で剣大といひ、現在津山市の市章となっている。